

知覚されたソーシャルサポート尺度の計量心理学的特性の検討

筑波大学大学院(博)心理学研究科 宮崎 隆穂

筑波大学心理学系 小玉 正博

駒澤大学文学部心理学科 佐々木 雄二

Development of a Perceived Social Support Questionnaire and Examination of its Psychometric Properties

Takao Miyazaki and Masahiro Kodama (*Institute of psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305-0821*) and Yuji Sasaki (*Department of Psychology, Komazawa University, Tokyo 154-8525*)

This paper describes the development of an instrument, the Perceived Social Support Questionnaire (PSSQ). Items related to perceived social support were identified from the literature, and from the results of a pilot study with open ended question. In study I, a 24-items questionnaire was administered to 183 students. A factor analysis using a most likelihood with varimax rotation resulted in 3 sub-scales. These sub-scales are: support from significant other, support from friends, and support from parents. By selecting 23 items, a new version of the PSSQ was developed. In study II PSSQ was administered to 193 students to examine its reliability and validity. Test-retest reliability as well as internal consistency indicated that the three sub-scales were reliable. Values for criterion related to validity were observed to be high. The construct validity was determined by testing "Buffering hypothesis". These psychometric tests demonstrate the usefulness of the scales.

Key words: The Perceived Social Support Questionnaire (PSSQ), College students, Psychometric properties.

問 題

ソーシャルサポートが心理的・身体的健康と関連しているという知見から、その研究は膨大な数見られる(Cohen, 1985)。特に社会心理学の領域では以下の3つの次元に分類されている(Barrera, 1986)。
①社会的包絡(social embeddedness)②知覚されたサポート(perceived support)③実行されたサポート(enacted support)このうちその測定の簡便さや心理的・身体的症状との関連が強いとの理由から、ソーシャルサポートをその個人の持っている利用可能性の信念(知覚されたサポート)として捉える研究が増えてきている。このような知覚されたソーシャルサ

ポート研究に関しては、常にソーシャルサポートにはどのような種類があるのかという疑問が問題にされてきた。先行研究を概観すると、名称は違うが、大別して道具的サポートと情緒的サポートに分かれるということでは大筋で一致しているように思われる。ここで、道具的サポートとは、何らかのストレスに苦しむ人にそのストレスを解決するのに必要な資源を提供したり、情報を与えたりといった物理的・具体的サポートであり、情緒的サポートとはストレスに苦しむ人の傷ついた自尊心や情緒に働きかけてその傷を癒やし、自ら積極的に問題解決に当たれるような状態に戻すような働きかけのことである。単にサポートには何種類あるかという内容の

分類の問題にしても、Lin(1986)やPattison(1977)のように道具的サポートと情緒的サポートで十分であると主張する立場もあれば、Barrera(1983)のように、6種類のサポート(物質的支援、行動的援助、ガイダンス、親密な相互作用、フィードバック、肯定的社会情報)にまで細かく分類すべきだと主張する立場もある。この知覚されたソーシャルサポートを分類する際の混乱は、測定する尺度に関してもいくつかの違ったタキソノミーに従った尺度が存在するという結果を導いている(Sarason, I. G., Levine, H. M., Robert B. B., 1983; Cohen, 1985)。いずれの尺度も提供されるサポートの領域別に下位尺度が存在し(例えば、評価的、所属的、実質的、自尊的、等の分類)、結果としてかなり質問項目の量の多い(40-50項目)尺度になっている。これらの尺度は被調査者に多大な労力を課すため、バイアスがかかりやすいとの指摘もある(Barrera, 1981; Holahan & Moos, 1983)。我が国でも、本間ら(1987)や周(1993)、嶋(1991)などによる尺度作成の試みがあるが、やはりある程度下位尺度によるソーシャルサポートの分類に力点が置かれている感がある。しかし一方で浦(1989)は、知覚されたソーシャルサポートを、評価的、所属的、実体的、自尊的、という下位尺度に分類した尺度を用いたところ、これら4種類のサポートの弁別性が低いと報告している。この知見からは、知覚されたソーシャルサポートの測定の際にサポート内容の分類があまり細かくなってもさほどの情報量の違いがないことが示唆される。むしろ情報量という観点において変わらないのであれば、多岐にわたる内容分類よりもシンプルな分類の方が望ましいと思われる。以上のことから、知覚されたソーシャルサポートの測定尺度に関する問題点としては、①質問紙調査の際、項目数が比較的多くなるので被調査者にかかる負担が大きい。②サポートの内容を領域別に分類することの妥当性への疑問、等が挙げられる。よって本研究では被験者にかかる負担が少なく、かつ計量心理学的な検討に耐える、新しい知覚されたソーシャルサポート尺度を作成することを目的とする。

研究 I

目的

大学生を対象として、知覚されたソーシャルサポートを測定するための尺度を作成することを目的とする。具体的には尺度を構成する項目を収集し、項目分析など尺度の計量心理学的特性を検討する。

方法

調査対象および調査時期 項目を収集するための予備調査は1996年9月から10月にかけて数回の調査が実施され、大学生合計42名が調査対象とされた。予備調査をもとに構成された尺度の本調査については1996年10月に行われ、大学生183名が調査対象とされた。

手続き 予備調査に関しては、自由記述で項目を収集した。本調査に関しては、授業時間中に調査者の立ち会いのもとで質問紙を配布、回収するという集団法で行われた。

予備項目の作成 項目を収集するにあたって、Zimet, D. G. ら(1988)によるMultidimensional Scale of Perceived Social Support(MSPSS)、本間ら(1987)による日本語版ソーシャルサポート尺度、嶋(1991)による尺度などを参考とした。さらにT大学の大学生42(男子18名、女子24名)名から自由記述によって項目を収集した。項目は、総数で135項目収集された。KJ法を参考に項目内容については、大別して「情緒的サポート」と「実体的サポート」の2つに分類された。ここから質問項目に不適当と思われるものや一般性がないと思われるものを取り除いた。さらに内容的に近いものをグルーピングし整理した。尺度の構成については、Zimet ら(1988)のMSPSSを参考にし、サポート源である「家族」「友人」「特別な人(重要な他者)」という3つのカテゴリーを採用し、サポートの内容的分類である「情緒的サポート」「実体的サポート」の2分類をあわせ、 3×2 の6領域、24項目の尺度を構成した(Table 1)。回答は、7件法で評定を求めた。

結果と考察

(1) 項目分析

各項目が取りうる値は1-7点であった。項目平均は4.9-6.3の範囲にあり、標準偏差は0.9-1.6の範囲にあった。また各項目を合計した得点の分布をFig. 1に示す。尖度は、 $Sk = -0.22$ 。歪度は $Ku = 0.34$ であった。各項目平均及び標準偏差は、おおそ適正な範囲内にあることが確認されたが、一部の項目についてはいわゆる天井効果が疑われた。全体の尺度合計得点の分布については、尖度や歪度からすると分布の形がやや右寄り、扁平であることが示されるが、Fig. 1よりほぼ正規分布に近いことが読みとれる。以上より、知覚されたソーシャルサポート尺度は全体として項目分析においては適正な結果を示したといえる。

Table 1 領域別知覚されたソーシャルサポートの原項目

	情緒的サポート	実体的サポート
家族から	<ul style="list-style-type: none"> ・私は必要ときに家族に悩みをきいてもらえる。 ・私の家族は、私のことを信頼してくれている。 ・私の家族は、私の決めたことを尊重してくれる。 ・私の家族は私のことを心配してくれている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・私の家族は、金銭的な援助をしてくれる。 ・私の家族は必要なものを買ってくれる。 ・私の家族は、悩み事に対して的確なアドバイスをくれる。 ・私の家族は急に助けが必要になった時に手を貸してくれる。
友人から	<ul style="list-style-type: none"> ・私は必要ときに友人に悩みを聞いてもらえる。 ・私の友人は喜びや悲しみをわかちあってくれる。 ・私の友人は私のことを信頼してくれている。 ・私の友人は、私に誤りがあれば率直に指摘してくれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・私の友人は、授業のノートを貸してくれる。 ・私の友人は、必要ときに車を出してくれる。 ・私の友人は、休講やバーゲンなど有益な情報を教えてくれる。 ・私の友人は、私が病気になったときに面倒をみてくれる。
特別な人(重要な他者)から	<ul style="list-style-type: none"> ・必要ときにそばにいてくれる特別な人がある。 ・喜びや悲しみを分かち合うことのできる特別な人がある。 ・私のことを信頼してくれている特別な人がある。 ・私に誤りがあれば率直に誤りを指摘してくれる特別な人がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・急に助けが必要になったときに手を貸してくれる特別な人がある。 ・病気になったとき、面倒をみてくれる特別な人がある。 ・悩み事に対して的確なアドバイスをしてくれる特別な人がある。 ・一緒にたのしく食事してくれるような特別な人がある。

(2)最終項目の決定

本研究で収集された項目群の因子構造を検討するために最尤法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、概念的にふさわしく因子の解釈のしやすさを考慮して、3因子解が採択された。全分散のうち3因子が説明する分散は87.9%(I = 63.8%, II = 16.4%, III = 7.7%)であった。第1因子は「特別な人からのサポート感」(8項目, 寄与率63.7%, $\alpha = .94$), 第2因子は「家族からのサポート感」(8項目, 寄与率16.4%, $\alpha = .84$), 第3因子は「友人からのサポート感」(8項目, 寄与率7.7%, $\alpha = .79$)と命名された(Table 2)。しかし、前段の項目分析の結果や、I-T相関・削除した後の内的整合性係数などを検討してみると第三因子「友人からのサポート感」尺度のうち項目3が不適な項目であると見なされ、予備項目から削除することに決定された。よって、知覚されたソーシャルサポート尺度は全23項目に決定された。

(3)各下位尺度間の相関と尺度としての信頼性

知覚されたソーシャルサポート尺度は、「特別な人からのサポート感」「家族からのサポート感」「友人からのサポート感」という3つの下位尺度からなる。これら3つの下位尺度間の関係を検討するため

に、学年差と男女差の影響を取り除いた pearson の偏相関係数を求めた。Table 3によると「特別な人からのサポート感」と「家族からのサポート感」の相関係数は .36($p < .01$)、さらに「特別な人からのサポート感」と「友人からのサポート感」の相関係数は .56($p < .01$)であった。「家族からのサポート感」と「友人からのサポート感」の相関係数は .42($p < .01$)であった。各下位尺度間において有意な弱い相関が見られた。

知覚されたソーシャルサポート尺度総得点と各下位尺度間の相関係数は、全体と「特別な人からのサポート感」では .86($p < .01$)、全体と「家族からのサポート感」では .72($p < .01$)、全体と「友人からのサポート感」では .78($p < .01$)であった(Table 3)。全体的に有意な強い相関が見られた。「特別な人」と「友人」の因子がもっとも相関が高いのは大きく包含すれば「特別な人」も「友人」の範疇に含まれると考えられるためであろう。このことは各下位尺度が分散にして15-34%ぐらいの共通部分をもちながらもそれぞれ独自の領域も測定していることを示唆している。

各下位尺度の信頼性に関しては、内的整合性係数 α が使用された。「特別な人からのサポート感」で

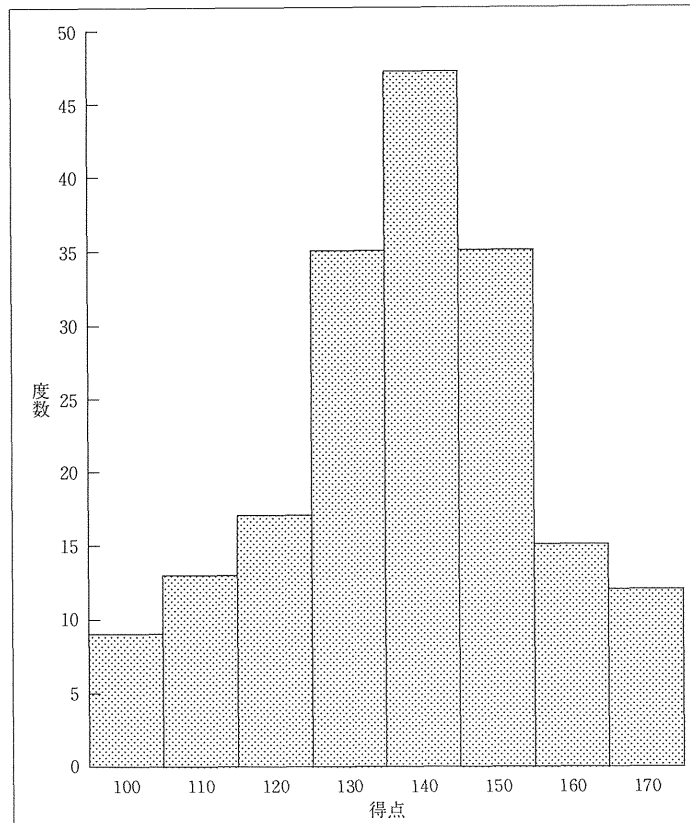


Fig. 1 知覚されたソーシャルサポート尺度総得点の分布

は .94, 「家族からのサポート感」では .84, 「友人からのサポート感」では .79 であった。すなわち各因子がそれぞれ下位尺度としての信頼性を満足させる水準にあると考えられる。

(4) 性差の分析

性差を検討するために、 t 検定を行ったところ、全体の尺度得点については統計的に男女差は有意であり ($df=181$, $t=-4.39$, $p<.01$)、女性の方が得点が高かった。各下位尺度については、「特別な人からのサポート感」では男女差は有意 ($df=181$, $t=-3.74$, $p<.01$) であり女性の方が得点が高かった。「家族からのサポート感」では男女差に有意傾向 ($df=180$, $t=-1.73$, $p<.10$) がみられ、女性の得点が高かった。「友人からのサポート感」では男女差は有意 ($df=181$, $t=-5.11$, $p<.01$) であり、女性の方が得点が高かった。これは、一般的に女性は男性に比べて知覚されたサポートを高く報告することを示すものであり、従来の知見とも一致する (Leavy, 1983)。

研究 II

目的

研究 I で作成された尺度の信頼性・妥当性を検討することを目的とする。具体的には、知覚されたソーシャルサポートに関連するといわれる不安、抑うつなどの心理的諸変数との関係を検討することによって基準関連妥当性を検討する。また先行研究では、ソーシャルサポートの持つ機能として、健康増進機能やストレス緩衝機能が上げられている (稲葉, 1987)。これらをめぐって提出された仮説が緩衝仮説と直接仮説である。緩衝仮説では、ソーシャルサポートは「ストレスが存在しないときには心理的な症候には直接の効果をもたらさないが、ストレスが存在するときにそれを緩衝する機能をもつ」と想定される。すなわち、一定のストレスに直面したときにソーシャルサポートが低い人は、心理的な症候においてダメージを受けやすいが、ソーシャルサポートが高い人はダメージを受けにくい、

Table 2 知覚されたソーシャルサポート原尺度の因子分析

項 目 内 容	因子負荷量			共通性：h2
	I	Ⅱ	Ⅲ	
Ⅰ・特別な人からのサポート感				
12・喜びや悲しみを分かち合うことのできる特別な人がある。	90	09	12	0.83
6・必要なときにそばにいてくれる特別な人がある。	87	-03	23	0.81
18・私のことを信頼してくれている特別な人がある。	86	13	19	0.79
23・一緒にたのしく食事してくれるような特別な人がある。	85	06	16	0.75
11・病気になったとき、面倒をみってくれる特別な人がある。	81	03	21	0.70
24・私に誤りがあれば率直に誤りを指摘してくれる特別な人がある。	72	21	22	0.61
17・悩み事に対して的確なアドバイスをしてくれる特別な人がある。	67	40	23	0.65
5・急に助けが必要になったときに手を貸してくれる特別な人がある。	62	14	35	0.52
Ⅱ・家族からのサポート感				
19・私の家族は急に助けが必要になった時に手を貸してくれる。	27	80	00	0.28
13・私の家族は、悩み事に対して的確なアドバイスをくれる。	26	78	09	0.68
2・私は必要なときに家族に悩みをきいてもらえる。	03	68	13	0.48
14・私の家族は、私の決めたことを尊重してくれる。	29	63	03	0.48
7・私の家族は必要なものを買ってくれる。	-01	51	24	0.31
1・私の家族は、金銭的な援助をしてくれる。	-18	49	31	0.37
8・私の家族は、私のことを信頼してくれている。	25	46	16	0.30
20・私の家族は私のことを心配してくれている。	01	44	33	0.30
	-05	23	22	0.10
Ⅲ・友人からのサポート感				
10・私の友人は喜びや悲しみをわかちあってくれる。	46	12	65	0.64
16・私の友人は私のことを信頼してくれている。	34	20	62	0.54
4・私は必要なときに友人に悩みを聞いてもらえる。	20	18	58	0.40
21・私の友人は、私が病気になったときに面倒をみってくれる。	30	13	55	0.41
15・私の友人は、休講やバーゲンなど有益な情報を教えてくれる。	01	29	52	0.35
9・私の友人は、必要なときに車を出してくれる。	25	00	47	0.28
22・私の友人は、私に誤りがあれば率直に指摘してくれる。	25	15	46	0.29
3・私の友人は、授業のノートを貸してくれる。				
負荷量の二乗和	33.9	8.75	4.12	
寄与率(%)	63.7	16.4	7.7	
累積寄与率(%)	63.7	80.2	87.9	

*注：因子負荷量は元の値に100をかけて整数に丸めてある

Table 3 各下位尺度間の相関

	尺度総得点	特別な人からのサポート感	家族からのサポート感	友人からのサポート感
尺度総得点	1.00	0.864	0.722	0.788
	0.0	0.001	0.001	0.001
特別な人からのサポート感		1.00	0.362	0.561
		0.0	0.001	0.001
家族からのサポート感			1.00	0.421
			0.0	0.001
友人からのサポート感				1.00
				0.0
ベック抑うつ性尺度	-0.387	-0.291	-0.259	-0.408
	0.001	0.001	0.001	0.001
特性不安尺度	-0.485	-0.467	-0.262	-0.405
	0.001	0.001	0.001	0.001

*相関係数は基本的に Pearson の積率相関係数であるが、ベック抑うつ性尺度については Spearman の順位相関係数である。

・上段：相関係数

・下段：有意確率

ということになる。一方、直接仮説ではソーシャルサポートが「ストレスラーがあるうがなからうが心理的症候に直接の効果を及ぼす」とされる。すなわち平常時も、そしてストレスラーに直面した際にも人の心理的症候においてはソーシャルサポートの多少による一定の差異が存在するとされる。Cohen & Willis(1985)はそれまでの先行研究をレビューしてこれらの機能の違いは測定する尺度による違いだと結論付けている。すなわち、ソーシャルサポートを測定する尺度が、「実行されたサポート」を査定している場合には直接仮説が、「知覚されたサポート」を査定している場合には緩衝仮説が支持されやすいという。そこで本研究では、緩衝効果が見られるかどうかを検討することによって、尺度の構成概念妥当性を検討する。信頼性に関しては再検査信頼性を検討する。

方 法

調査時期 結果(1)は研究Ⅰと同時に実施した。結果(2)－(4)については、1998年1月から2月にかけて実施した。

調査対象 結果(1)は研究Ⅰと同時に実施した。結果(2)－(4)については、T大学の大学生193名(男子90名、女子101名、欠損2名)が調査対象者であり、そのうち二回とも回答した者は111名(男子44名、女子66名、欠損1名)であった。

手続き 2、3週間の間隔を置いて二回に分けて下記の質問紙を実施し、集団に対して調査者が口頭で説明を行った。

関連する心理的諸変数の測定 ①ベック抑うつ性尺度(Beck Depression Inventory; BDI)を用いて抑うつ傾向を測定した。今回は林(1988)による日本語版を使用した。16項目から構成されており、回答形式はそれぞれの質問について4種類の記述(だんだん症状が重くなっていく)からあてはまるものに○をつけるという方式で、強制選択ではない。今回の得点化では複数の得点があった場合、点数の高い方を選択した。②清水・今栄(1981)による、Spielbergerら(1970)の状態－特性不安検査(STAI)の日本語版を用いて特性不安を測定した。この尺度では不安を状態不安と特性不安とに分けて考えている。今回は、先行研究にない特性不安尺度である20項目だけを使用した。前者は自律神経系の興奮などを伴う一時的、状況的な不安状態を示す。後者は、ストレス状況に対して状態不安を喚起させやすい傾向であり、比較的安定した個人内特性と捉えられる。すなわち後者は、ストレス状況下において前者を生み出

す個人差特性とすることができる。回答形式は、普段一般にどの程度の状態であるかを「決してそうでない」「たまにそうである」「しばしばそうである」「いつもそうである」までの4段階で回答させた。

ストレスラー・ストレス反応の測定 ストレスラーの測定は、尾関ら(1990)による大学生のストレス自己評価尺度を一部変更して47項目の尺度を構成した。回答は5件法(体験がない、なんともなかった、やや辛かった、かなり辛かった、非常に辛かったまで)で評定を求めた。素点を単純に加算して、得点が高いほど認知されたストレスラーが多いことを示す。ストレス反応尺度は、心理的ストレス反応尺度(Psychological Stress Response Scale: PSRS:新名ら.1990)を用いて35項目の尺度を構成した。回答は4件法(全くあてはまらない、ややあてはまる、かなりあてはまる、非常にあてはまる)で評定を求めた。

知覚されたソーシャルサポートの測定 研究Ⅰで作成した尺度を用いて23項目の尺度を構成した。回答は7件法(全くそう思わない、そう思わない、あまりそう思わない、どちらとも言えない、ややそう思う、そう思う、非常にそう思う)で評定を求めた。

結果と考察

(1)基準関連妥当性の検討

それぞれの尺度について性と学年の影響を取り除いた偏相関を求めた。基本的にはpearsonの積率相関係数を用いたが、ベック抑うつ性尺度得点は項目内容から順序尺度と判断されたので、spearmanの順位相関係数が用いられた。結果、「知覚されたソーシャルサポート尺度総得点」「特別な人からのサポート感尺度得点」「家族からのサポート感尺度得点」「友人からのサポート感尺度得点」とベック抑うつ性尺度得点との相関係数はそれぞれ、 $-.39(p<.01)$ 、 $-.29(p<.01)$ 、 $-.26(p<.01)$ 、 $-.41(p<.01)$ であった(Table 3)。また全体尺度得点とその下位尺度得点と特性不安尺度得点の相関係数はそれぞれ、 $-.49(p<.01)$ 、 $-.47(p<.01)$ 、 $-.26(p<.01)$ 、 $-.41(p<.01)$ であった(Table 3)。これらは先行研究の結果を支持するとともに、今回作成された知覚されたソーシャルサポート尺度の基準関連妥当性を支持するものでもある。細かく見ていくと「家族からのサポート感」の下位尺度については抑うつ、不安両側度ともに若干他の下位尺度よりも低い結果(抑うつが $-.26$ 、不安が $-.26$)が得られた。嶋(1992)は大学生におけるソーシャルサポートを、家族、同性の友人、異性の友人の3カテゴリーに分類して測定して

いるが、家族からのサポートが精神的健康(GHQによって測定されている)に対して一番相関が高いという結果を得ている。これは一見矛盾する結果に見えるが、嶋(1992)が考察で述べているように嶋の研究では、自宅通学生が多かったということが影響しているとも考えられる。すなわち本研究では標本集団の特徴として、自宅通学生が少なく、家族と離れて暮らしているため、家族からのサポート感が抑うつや不安などの心理的状态に反映されるところが少ないと推測される。

(2)構成概念妥当性の検討

各下位尺度間の相関 3つの尺度のそれぞれの下位尺度間の関係を検討するため、pearsonの相関係数を求めた。ストレス反応と「対人関係上のストレス」、「自分や将来の関心に関するストレス」、「学校や生活上の不満からくるストレス」、「課外活動におけるストレス」それぞれとの間には有意な弱い相関がみられた。相関係数はそれぞれ.25($p<.00$)、.32($p<.00$)、.35($p<.00$)、.32($p<.00$)であった。また、知覚されたソーシャルサポート尺度得点とストレスサ－尺度得点との間には、統計的に有意な相関係数は見いだされなかった。

知覚されたソーシャルサポートのストレス緩衝効果について ストレスサ－尺度とストレス反応について、2回の調査の素点合計の差を取り、それぞれストレスサ－変化量、ストレス反応変化量とした。ストレスサ－変化量の上位35%、下位35%をそれぞれ「ストレスサ－増加群」「ストレスサ－減少群」とし、また一回目に測定された知覚されたソーシャルサポート尺度得点の上位35%、下位35%をそれぞれ「ソーシャルサポートを多く報告した群」(以下SS

高群)・「ソーシャルサポートをあまり報告しなかった群」(以下SS低群)として、「ストレスサ－変化量」(増加群・減少群)×「知覚されたソーシャルサポート」(高群・低群)によるストレス反応変化量の違いを2×2の2要因分散分析によって検討した(Fig.2参照)。ストレス反応変化量についての2要因分散分析の結果、交互作用が5%水準で有意であった[$F(1,57)=4.56, p<.05$]。ストレスサ－変化量の単純主効果検定を行ったところ、「SS低群」では0.1%水準で有意であり[$F(1,27)=14.62, p<.001$]、「SS高群」では有意ではなかった[$F(1,30)=0.26, n.s.$]。また、知覚されたソーシャルサポートの単純主効果検定を行ったところ、「ストレスサ－減少群」では有意ではなかったが[$F(1,26)=1.51, n.s.$]、「ストレスサ－増加群」では10%水準で有意傾向であった[$F(1,31)=3.354, p<.10$]。

以上の結果からは、ストレスサ－減少群については(ストレスサ－が少ない状態)、知覚されたソーシャルサポートが多いか少ないかということがストレス反応変化量に影響を与えない。また、ストレスサ－増加群については(ストレスサ－が多い状態)、SS高群の方が、SS低群よりもストレス反応変化量が少ないことがいえる。このことから「ストレスサ－が多い状態にのみソーシャルサポートのストレス緩衝効果が現れる」とした緩衝仮説が支持され、この知覚されたソーシャルサポート尺度の構成概念的な妥当性は支持されたとと言える。

(3)再検査信頼性の検討

知覚されたソーシャルサポート尺度の再検査信頼性を確かめるため、2回の調査の尺度得点間の相関係数を求めた。各因子ごとの相関係数はそれぞれ

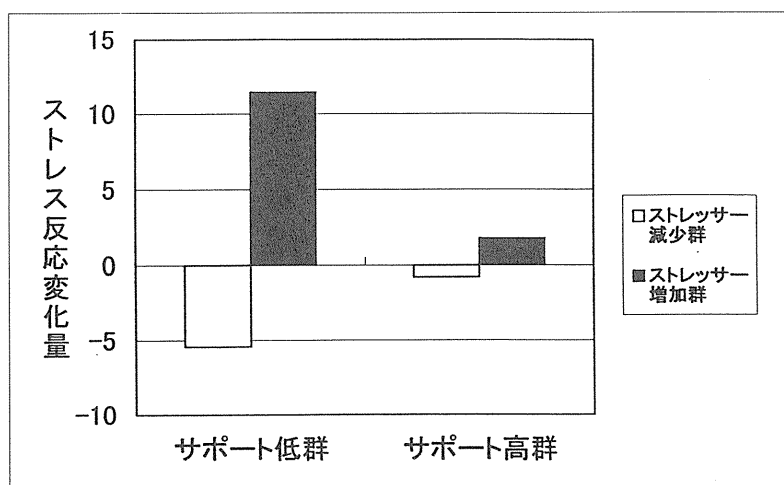


Fig. 2 サポートがストレス反応に与える影響

.80($p<.001$), .83($p<.001$), .65($p<.001$)であり、それぞれ有意な強い相関がみられ、知覚されたソーシャルサポート尺度の高い再検査信頼性が支持されたといえる。

結 論

研究Ⅰでは、知覚されたソーシャルサポートの尺度項目が収集され、その計量心理学的特性が検討された。項目分析・項目-合計相関・因子分析などを検討した結果、不適とみなされる項目が削除され、23項目からなる尺度が作成された。また、女性の方が男性よりも一般に尺度得点が高いことが示されたが、これは従来の先行研究の知見と一致するとともに、今後この尺度を用いる研究では性差による影響を考慮する必要があることを示唆している。下位尺度については、予備項目収集の段階でサポートの内容的分類である2分類(情緒的サポート・具体的サポート)×サポート源(家族・友人・特別な人)の計6領域24項目から設定されたが、実際に因子分析によって表れた解釈可能な因子は、サポート源のみ(家族からのサポート・友人からのサポート・特別な人からのサポート)からなるものであった。このことは、これまでの知覚されたソーシャルサポートを測定する際の下位尺度の内容分類のあり方に一石を投じる結果である。すなわち、因子分析による結果では、下位尺度の決定に関してサポート源による分類の方が内容的分類よりも優先されたことを示唆しており、浦(1989)が知覚されたソーシャルサポートの測定の際、評価的、所属的、実体的、自尊的、という下位尺度の弁別性が高くないと報告している知見(彼はこの研究で項目の合計点を用いている)と併せて、知覚されたソーシャルサポートを内容によって細かく分類し、測定することの必要性に対する疑問の傍証となるであろう。勿論この点については、今後PSSQと他の既存尺度との詳細な関連を更に検討しなければならないであろう。

研究Ⅱでは、研究Ⅰで作成された尺度の信頼性・妥当性が検討された。その結果、抑うつや不安などソーシャルサポートと関連があるとされる心理的諸変数では、標本集団の特徴と合致した知見が得られ、本尺度の基準関連妥当性が確認された。また「ストレスが多い状態にのみソーシャルサポートのストレス緩衝効果が現れる」とした緩衝仮説も一応支持され、この知覚されたソーシャルサポート尺度の構成概念的な妥当性は支持されたと言える。今後の課題としては既存の知覚されたソーシャルサポート尺度との併存的な妥当性を検討していくこと

などが挙げられる。

引 用 文 献

- Barrera, M., Jr., Sandler, I. N. & Ramesey, T. B. 1981 Preliminary development of a scale of social support: Studies on college students. *American Journal of Community Psychology*, 9, 435-447
- Barrera, M., Jr., Ainlay, S. L. 1983 The structure of social support: A conceptual and empirical analysis. *Journal of Community Psychology*, 11, 133-143
- Barrera, M. J. 1986 "Distinction between social support concepts, measures, and models", *American Journal of community Psychology*, 14, 413-445.
- Cohen, S. & Wills, T. A. 1985 Stress, Social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- 林 潔 1988 学生の抑うつ傾向の検討. *カウンセリング研究*, 20, 162-169.
- Holahan, C. J. & Moos, R. H. 1981 Social support and psychological distress: A longitudinal analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, 90, 365-370.
- 本間道子・阿部洋子・宇野儀子・堀野 緑 1987 ソーシャルサポート尺度の日本語版の試み・予備的調査(Ⅰ) *日本女子大学紀要*, 83-98
- 稲葉昭英・浦 光博・南 隆男 1987 「ソーシャル・サポート」研究の現状と課題. *哲学*, 第85集, 109-148.
- Leavy, R. L. 1983 Social support and psychological disorder: A review. *Journal of Community Psychology*, 11, 3-21. Lin, N. 1986 Conceptualizing social support. In N. Lin, A. Dean & W. Ensel (Eds), *Social Support, Life events, and Depression*. Orlando: Academic Press. Pp.17-48.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田 彰・船津孝行 1990 大学生のストレス自己評価尺度. *一ストレス反応とコーピング* 日本心理学会第54回大会発表論文集, P721.
- Pattison, E. M. 1977 A theoretical-empirical base for social system therapy. In E. F. Foulks, R. M. Wintrob, J. Westermeyer & A. R. Favazza (Eds.), *current perspectives in cultural psychiatry*. New York: Spectrum. Pp.217-253.
- Sarason, I. G., Levine, H., Bashman, R. & Sarason, B. R. 1983 Assessing social support: The social support questionnaire. *Journal of Personality and*

- Social Psychology, 44, 127-139
- 嶋 信宏 1992 大学生におけるソーシャルサポートの日常ストレスに対する効果. 社会心理学研究, 7, 45-53.
- 清水秀美・今栄国晴 1981 STAIT-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版(大学生用)の作成 教育心理学研究, 29, 62-67.
- 周 玉慧 1993 在日中国系留学生用ソーシャルサポート尺度作成の試み. 社会心理学研究, 8, 235-245.
- Zimet G. D., Nancy W. D., Zimet. S. G. & Farley, G. K. 1988 The multidimensional scale of perceived social support. Journal of Personality Assessment, 52(1), 30-41
- 1998. 9. 30 受稿-